



——沖繩ソニー坊やは、半世紀ほど前、県内各地の道端に建てられ、現在5体残っているそうですね。具体的にはどこに？

紀々 本部町謝花、宜野湾市野嵩、西原町兼久、うるま市安慶名、糸満市名城です。私たちはいま、沖繩ソニー坊やプロジェクトの立ち上げを準備しているところですが、参加して下さる皆さんの情報(現時点)によりまずと当初は、久茂地の電波堂ビル付近をはじめ、沖繩本島各地に30〜35ほどあったようです。「離島にもいた」という情報はいまのところ寄せられていません。沖繩ソニー坊やは、卓上マスコットのソニー坊やと比べると容姿が少し違い

ます。卓上のソニー坊やのようにシティーボーイではなくブックリした体型で、その代わりに親しみやすい観があります。どうしてそうなったのかは工程の影響もありそうですが、いまのところ不明です。そもそも、約2メートルのコンクリート製ソニー坊やは沖繩だけのようで、それをだれがどこでどのように制作したのかも分かっていません。沖繩ソニー坊やの生みの親は、電波堂の創業者である私の祖父ですが、過去を振り返らず未来を見つめて生きるタイプでしたので記録を残さず、しかも70歳の若さで突然のように病で亡くなってしまったものですから、沖繩ソニー坊や誕生の経緯はまったく不明です。

——もう少し、沖繩ソニー坊やのプロデューサー的存在、新川唯介氏のプロフィールを。

紀々 新川唯介は、母方の祖父にあたります。戦後、米軍統治下にウエーブラジオ社を設立(1949年)し、各種通信機器の修理・製作、有線放送などの事業を営んでいました。あるとき「東京にトランジスタラジオをつくっている人がいる」という話を聞き、訪ねた先が東京通信工業株式会社、後のソニーでした。以来、創業者である盛田昭夫氏、井深大氏と親交を深めました。ウエーブラジオ社はソニーの沖繩総代理店になり、やがて、小売部門は電波堂、卸売部門は沖繩ソニー販売へ分か

文化の秋、食欲の秋など、この季節はいろいろな修辭がされますが、こんな話題はいかがでしょう。「ソニー坊や」です。とはいつても、全国的におなじみの卓上マスコット人形ではなく、沖繩で独自に分岐発展した約2メートルのコンクリート製交通安全人形です。佐藤栄作首相が来沖した1965年前後には設置され、現在、沖繩本島内に5体、残っています。トリウボウへ行こう、ラララン…のCMソングでおなじみの哲楽家・紀々(きき)さんは、実は、沖繩ソニー坊やの生みの親・新川唯介(しんかわただすけ)氏の孫で、電波堂☆沖繩ソニー坊や博物館の館長を務めています。紀々さんに、沖繩ソニー坊やの魅力についてうかがいました。(敬称略)

ソニー坊やがかわいそう 半世紀後も愛される理由

～ 紀々 氏に聞く(哲楽家・電波堂☆沖繩ソニー坊や博物館館長)～

紀々さんの推理は正しいと思う。知らない人にもお祖父さんの思いが伝わり、坊やを残さなくては、という気持ちに動かされるのではと言ってくださいました。

ハッピーな怪奇現象

——『週刊レキオ』の約30年前の特集で、道端に埋もれ、すっかり汚れてしまった沖繩ソニー坊やを取り上げています。その特集を企画するきっかけになったのは、Uターン青年からの「なつかしい坊や像を取り上げて」というリクエストでした。反響が大きく、その後、汚れている姿に「かわいそうだ」と思った某読者が、なんと、すべての人形(当時7体)を自腹で塗り直したエピソードもあらためて記事になりました。沖繩ソニー坊やの魅力は？

紀々 現存している各地の沖繩ソニー坊やは、きれいに塗り直されたり、その周りを緑化するなどされています。各地域の皆さんには「やってあげた感」などなく、「ウチの子」「あの子」という感覚で接しています。その地域に住む人々にとって、沖繩ソニー坊やは、それぞれ思い出に欠かせない存在なのでしょう。だからでしようか、他の地域にある沖繩ソニー坊やにはあまり関心を示さず、写真を見せると「ウチの子のほうがいい」という反応をします(笑)。私たちの会(ソニー坊やと仲間たち)に集う皆さん



とび出すな、車は急に止まれない、あげた手ににっこり笑って、待つゆとり

「プロジェクト」の思いは

——「沖繩ソニー坊やプロジェクト」電波堂☆沖繩ソニー坊や博物館」について。

紀々 私は、祖父の足跡をたどるうちに沖繩ソニー坊やのことも調べるようになり、地元の皆さんやファンの方々に大切にしたい「もとも」とい昔の沖繩ソニー坊やの写真を集めたい「沖繩ソニー坊やがどこにいたのか、沖繩ソニー坊やにまつわるエピソードを集めたい」「これまで沖繩ソニー坊やを大切に愛して守ってくださいました方々にお礼をお伝えしたい」です。ところで、私は、電波堂ビル3階のギャラリーホール「スペースアート」で「Studio紀々」を営んでいましたが、昨年11月、気持ちも新たに「電波堂劇場」電波堂☆沖繩ソニー坊や博物館をスタートしました。グランドピアノのあるレトロなレンタルスペースを使って、祖父が残した、戦後の沖繩をずっと見つめてきた歴史ある空間と沖繩ソニー坊やを残したい、という思いからです。

*問い合わせ

<http://sony-boya.okinawa/about>

沖繩ソニー坊やプロジェクト準備室
*電波堂☆沖繩ソニー坊や博物館は現在整備中

(聞き手 鈴木孝史 編集室タッカーハ
ウス代表取締役)